

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

(医)同心会古賀総合病院 放射線技術部 椎葉拓郎

1. 参加した目的と達成度について

私が本研修に参加した動機は、過去 3 回の研修生の方々の報告を拝見させて頂いて、自分も米国での研究や医療制度を体感してみたいと思ったからである。そこで、目的を日本と米国との医療制度(技師制度)の違いを知ること、および 7TMRI や Molecular Imaging などの最先端の研究と今後の展望を知ることとした。研修期間中は、引率の広島大学木口先生をはじめ、GE Healthcare のスタッフの方々の厚いサポートのもと、濃密なスケジュールを何とか消化することができた。達成度については、日米での医療制度の違いが技師制度の違いに影響していること、7TMRI の実際の画像と特徴および Molecular Imaging の現状と将来展望を知ることができ、目的は達成できたと考えている。

2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について

まず、日米での大きな制度の違いは、米国の放射線技師(RT)は、所持しているライセンスによって操作可能なモダリティが限られていることである。X 線単純撮影をはじめに、CT、MRI、US、NM などは教育を受けライセンスを取得しなければ操作できない。また、CT や MRI の造影検査については、血管の確保からインジェクションおよび抜針までがライセンスで認められている作業であるということであった。各モダリティで得られた画像データは、PACS へ送られ、必要に応じて 3D ラボでマニュアルに沿った 3D・MIP 画像作成や計測処理などが行われていた。2ヶ所ある 3D ラボには、MRI や CT のライセンスを持つ RT が専属で勤務しており、さまざまなメーカーのワークステーションを用いて作業を行っていた。これらの処理に要する費用は、検査費用に上乗せされるが、日本と比べるとはるかに高額な印象を受けた。一人の一日あたりの作業量も PC 管理されており、日本には無いシステムだと感じた。このように、各モダリティに特化した RT が存在することは、非常に専門性が高く、診療に有利だと思われた。しかし、このことが医療費の高騰を招いている一因になっているようにも思われた。また、放射線治療の施設では、放射線腫瘍医、医学物理士、線量測定士などさまざまな職種が連携して治療にあたっているが、どの職種もそれぞれの分野のプロフェッショナルとして対等な立場で作業を行っているように感じた。

3. 今回の研修で得られた成果をどのように活かすか

本研修で知り得た最先端の研究内容や放射線診療の将来を常に意識しながら、新たな自分の研究の位置づけや役割を考えていければと思う。また、米国の RT の良い部分を取り入れて、日本の医療システムの中で合理的で専門性の高い診療放射線技師像を目指していければと考える。

稿を終えるにあたり、引率を引き受けて頂いた広島大学木口先生、多大な支援を頂いた GE Healthcare の皆様、研修の機会を与えて頂いた日本放射線技術学会学術交流委員の皆様、快く派遣に承諾頂いた同心会古賀総合病院診療放射線技師諸兄に感謝申し上げます。



Photo comments: 毎日講義が行われた Lucas Center にて、左から 4 番目が筆者。